

## 第80回麻布獣医学会 一般講演9

## 長期の消化管内異物により低蛋白血症に 陥ったと考えられる犬の1例

杉山 淳, 村井 裕美, 石川 勝行

石川動物病院

### はじめに

7歳齢のマルチーズが急激な食欲低下を主訴に来院した。血液検査で重度の低蛋白血症と白血球数の上昇, 軽度貧血が確認され, 蛋白漏出性腸症などを疑って輸液中心に治療を行った。消化管内異物を疑ってバリウム検査を行ったところ, 胃~十二指腸にかけてバリウムを吸着した編糸状の陰影を確認し, 内視鏡にて除去した。その後症例は順調に回復し, 術後約1か月の時点で血漿蛋白値はほぼ回復している。

**症例:**マルチーズ, 7歳齢, メス, 1か月前から食欲にムラがあり, 時折嘔吐していた。2日前から食欲廃絶となり, 来院。

**身体検査:**体温39.1℃, 削瘦, 触診にて腸管の肥厚と軽い上腹部痛を認めた。血液検査では, 低蛋白血症 (TP:3.0 g/dl, Alb:1.0 g/dl 以下), 白血球数の上昇, 軽度貧血が認められた。

**X線所見:**小肝症, 腹囲やや膨満, 胸水貯留が認められたが, 確定診断は得られなかった。

**臨床経過1:**以上の検査結果より低蛋白血症の原因を, ①消化管出血, ②蛋白漏出性腸症, ③肝機能不全, を疑い入院とし輸液を開始した。第2病日より元気・食欲ともにやや回復するも, 第3病日には食べたものを嘔吐して再び元気消沈となった。これら

の症状より胃内異物を疑って消化管バリウム検査を行った。

**消化管バリウム検査:**バリウムの胃内停滞像が得られ, 60分後の所見にて胃内から十二指腸にかけて直径1 cmほどの編糸と考えられる網目状の陰影が確認された。

**内視鏡検査:**胃幽門部から十二指腸にかけて直径5 mmの編糸 (ロープ様) が二重になって視察され, 牽引することにより摘出した。

**臨床経過2:**術後症例は徐々に回復し, 術後はまったく嘔吐は見られなかった。術後約1か月での血液検査ではTP6.6 g/dlとほぼ正常に回復した。

### 考察

本症例は約1か月前の消化器症状の時点で既に今回の紐状物を飲み込んでおり, 消化・吸収不良と断続的な嘔吐により低蛋白血症に陥ったものと考えられた。X線不透過性の消化器内異物を疑った場合, 消化管バリウム検査は煩雑な検査法であるものの本症例においては非常に有用な検査であったと言える。約1か月間の慢性的な消化管炎症で低蛋白血症が起り得るか, やや疑問の残るところではあるが術後約1か月でTPは正常値に回復していたことから, 起り得る現象であると考えられた。